韓国京畿道外国語教育研修院現職日本語教師研修における 2007 年度「会話（中）」クラスの授業報告

高橋　純子

要　旨

本稿は、2007 年度京畿道外国語教育院現職日本語教師研修での中級会話授業の報告である。2006 年度の授業を踏まえた授業構成に関する若干の変更点、及び 2007 年度の授業の成果を報告し、毎授業後に研修生から寄せられた「コメント及び質問カード」と授業担当者の観察に基づき、研修生の特徴、共通する日本語の間違いを紹介し、今後の課題について考察する。

【キーワード】「コメント及び質問カード」　変更点　共通する間違い　研修生の特徴

Report of Oral Skill Developing Classes on the In-service Japanese Language Teacher Training Program at the Gyeonggi-do Institute for Foreign Language Education in 2007

TAKAHASHI Junko

【Abstract】This is a report of oral skill developing classes on the training program for Korean teachers of Japanese of the Gyeonggi-do Institute for Foreign Language Education in 2007. Some modifications in organizing class activities, the characteristics of the teachers, some common mistakes among them and some proposals are shown.

【Keywords】comment and question cards, modifications of lessons, common mistakes, characteristics of teachers in 2007

1.　はじめに

2005年度に始まった本研修は、2年目2006年度から会話授業のみ、研修生の会話能力に応じ､2つのレベルのクラス編成で授業を行った。その経緯についての詳細は本センター論集第22号許明子「京畿道外国語教育研修院現職日本語教師研修の実施報告―2006年度韓国国内研修の実施について―」（2006：PP.47～70）を参照されたい。また本研修で使用した中級会話教材に関する詳細に関しては同論集同号高橋純子・小池康「京畿道外国語研修院現職日本語教師研修のための教材開発―中級会話教材制作―」（2007：pp.57～70）を参照されたい。

本稿は、2006年度、2007年度における中級会話授業の報告である。会話授業は、会話（高）と会話（中）とクラスを2つ設けたため､以後､本報告での中級会話授業を会話（中）と表示する。年齢、男女別人数、会話能力を中心とする日本語能力、日本滞在や来日経験の多寡など各年度の研修生の特徴を比較し、会話授業での取り組み、困難点、興味の所在、目的達成度などを、授業後、毎回研修生に書いてもらったコメントと教材制作者でもあり授業担当者でもある筆者の観察を基にして報告する。

2.　対象研修生

2006年度は、男性18名、女性27名で総勢45名であり、会話（中）には男性18名中17名が参加した。年代は50代の研修生が5名いた。2007年度は、男性10名　女性34名で総勢44名、会話（中）に参加した男性は10名中9名であった。年齢的には、今回は50代の研修生はおらず、最高年齢は48歳で、昨年度より年齢が若干低くなった。

会話（高）と会話（中）の2つのクラスへの割り振りは、まず、それぞれの授業での学習目標、活動内容をオリエンテーションにおいて説明した上で研修生に選んでもらうという形をとったが、自分の実力を過小申告する研修生が多く、あえて会話（高）のクラスで学びたいという研修生が少なく、人数に偏りができてしまった。その後、会話（高）の方がふさわしそうな研修生にクラスを移るよう促し、人数の調整を行った。会話授業を終えて、会話（高）会話（中）の両クラスにそれぞれ1名ずつ、配置が不適切ではなかったかという研修生が見られた。

2007年度は2006年度と比べると年齢差が縮まったが、いずれの年も会話（中）の受講者は高い年齢層の研修生が多いのが特徴である。また、会話（高）の受講研修生に比べると来日経験も少なく、日常での日本語使用も授業以外では必要なく、その機会にもあまり恵まれていない様子であった。

会話（中）に、ドイツ語教師から日本語教師になってまだ日が浅い研修生が3名いた。他の研修生の協力を得て授業を受けていた。この研修生たちは、会話授業だけではなく、他の授業でも予習に多くの時間をさかなければならないようであった。会話（中）クラス

内においてもレベル差のある研修生の「話す」能力をそれぞれ伸ばしていくことが会話（中）授業の課題であった。

3. 研修プログラム中での会話授業の配置とその効果

会話授業は会話（中）と会話（高）に分かれ、研修第 1 週目から 90 分授業で 9 コマが行われた。会話（中）は、10 名と 13 名のクラスが 2 つ、会話（高）は、11 名と 10 名のクラスが 2 つ設けられた。並行して文法授業、教授法授業が開講されていた。

研修の最初に会話授業が組み込まれたことは研修全般において良い影響を及ぼしたと考える。筆者は、会話授業の後、特集授業、聴解授業と担当したが、最初に会話授業で「話す」ことに慣れた学習者は、他の科目の授業での発話にあまり抵抗を覚えなかったように見えた。これは、会話授業を後半に設置した場合との比較ではないので厳密には評価できないが、少なくとも授業担当者としては、研修生の会話力、興味の在り処、反応のスピード、などをある程度把握していたため、後に続く他の科目の授業で、質問や意見を求めやすかったことは確かである。

4. 授業目標

会話（高）と会話（中）の大きな違いは、会話（高）がディベートを中心とした比較的大勢を聞き手にしたスピーチ形式の口頭表現練習に力を注ぐのに対して、会話（中）ではスピーチ形式と対話形式両方の口頭表現力養成を目指しているところである。会話（中）の教材構成は、1 つのトピックでスピーチ形式と対話形式の練習が対になっている。日本語であまり話し慣れていない研修生には、対話での相づち、うなずきなどを入れた自然な会話練習も欠かせないであろうと両者を盛り込んだ結果である。

対話では「話す」ことだけが上手になればいいのではなく、「聞く」ことも上手でなければならない。研修生の職業柄、今後、日本人や日本人日本語教師と交流し情報交換をするに当たり、自分から様々な情報を発信することも大切ではあるが、それ以上に相手の話を聞き、さらに相手から上手に話を引き出せる「上手な聞き手」であることも大切である。そのため日本人のコミュニケーションの特徴、日韓の会話運びの違いなどを意識すると共に「対話」練習にも力を注ぐことにした。会話（中）での授業全体の学習目標は以下の 2 点である。

(1) 紹介、説明、意見表明など複数の聞き手を相手に話す口頭表現能力の養成
(2) 友人や同僚などとの自然な対話を目指す口頭表現能力の養成

尚、各課の学習目標については、筑波大学留学生センター日本語教育論集 21 号高橋純子・小池康「京畿道外国語研修院現職日本語教師研修のための教材開発―中級会話教材制作―」（2007：pp.57 ～ 70）を参照されたい。

5.　授業報告

2006年度の授業を踏まえ、2007年度の授業では教室活動をいくつか変更した。変更箇所と変更のいきさつ、その結果を記す。

5.1　第1課の授業の組み立てにおける変更

第1課は、ウォーミングアップの活動で、ペアを組み、Yes-Noクエスチョンを用い、ペアの相手がどんな人であるかを知ろうとする活動であるが、運用において今回は多少の変更を加えた。

2006年度は、AとBの2種類の異なる質問シートを用意し、その答えを解答用紙の様々な図形の中に書き入れ、AとB異なる質問に答えた研修生同士がペアになり、Yes-Noクエスチョンを用いて、それぞれ書かれた言葉の意味を探っていき、相手のことを知るという活動を行った。その後、相手について知り得た情報をもとにクラス全体に自分のパートナーを紹介するという活動を行った。このゲームにはいくつかの規則があり、単に「はい、いいえ」と答えるのではなく、相手が正しいYes-Noクエスチョンをして、書かれた答えを当てたら、当てられた方は、そのことにまつわるエピソードを話したり、詳しく説明してもいいことになっている。しかし、相手がその言葉が何を意味するのかを当てなければ、ずっと「いいえ」を繰り返すことになる。話したくても話せない状態におかれる。

2007年度では、教科書の質問シートの答えではなく、各研修生が自分を表すキーワードを考え、それを記入していくことにした。また2人1組でのインタビュー活動ではなく、1人の研修生のキーワードが記入されたシートをコピーし、全員に配付し、1人の研修生に他の研修生全員がYes-Noクエスチョンの形で質問し、キーワードが何を意味するのか探っていくという活動に変更した。

しかし、この形態では1コマで全員をインタビューするには時間的に無理があり、まず、第1回目の授業で4～5人をインタビューし、その後の8回の会話授業の始めに10～15分ほど時間をとり、授業毎に1人ずつこの活動を行うことにした。クラス全体で1人の研修生のキーワードを共有することになるため、ペアでの質疑応答で得られた情報を元にして相手を全体に紹介するという活動は行わなかった。

	2006年度	2007年度
書き入れるもの	質問シートの答え	自分で選んだキーワード
質問形態	Yes-Noクエスチョン	Yes-Noクエスチョン
インタビュー形式	2人1組	1対クラス全体
紹介	有	無
活動の時間	第1回目の授業のみ	毎授業時10～15分

図1　第1課の活動の変更

Yes-No クエスチョンだけで質問するのは難しく、スムーズに行うには指導が必要であった。質問に詰まり、「いつ、どこ、だれ、どうして …」などの疑問詞を使う質問に流れてしまいがちであった。しかし、研修生たちは興味を持って取り組んでいた。

2 回目の授業からは自主的に、「次は私がします」と手を挙げた希望者から全体でのインタビューを進めていったが、ある時「若い未婚の先生方は自分の番が来るのを心配しているみたいです」と研修生の 1 人から告げられた。キーワードは自分で選ぶので、知られたくないようなことはキーワードにしなければいいのだが、具体的な質問に Yes-No で答えていくことで、知られたくないことに思いがけず答えてしまうことも確かにあるかもしれない。

Yes-No クエスチョンを正確に作るという作業は、疑問詞質問より難しい。質問者はある事実を推測、あるいは仮定し、それを言語化していかなければならない。この活動を通して授業担当者は研修生の文法力を始め、口頭での文章構築力などを評価することができる。ペアワークでは、どうしても疑問詞質問になってしまいがちである。初めての授業で研修生同士が情報交換し、知り合うという活動に重点を置くのであれば、その利点は大きいが、授業担当者としては、これから授業を展開していく上で、研修生の日本語力、問題点などを早期に把握できるということでは Yes-No クエスチョンは有効だと考える。

5. 2　発表と準備（8 回目、9 回目の授業）

2006 年度は教科書の配置通り、8 回目の授業で多数の聴衆を相手に話すスピーチ形式の発表をし、9 回目はペアで対話形式の会話発表をした。対話形式の会話発表に関しては、授業時間内にペアを作り、籤で会話で使用すべき表現、オノマトペ、慣用句などを選び、それらの表現を盛り込んでロールプレイを行った。2007 年度は 8 回目をスピーチ、会話両方の準備に当て、9 回目に両者の発表を行うことにした。研修生の口頭表現力の差が大きく、スピーチ準備において教師の指導が必要な研修生がいたためと、会話を即興で準備するより、ペア同士で授業時間後もじっくり練習したいとの要望があったからである。確かに、1 回の授業でペアを作り、課題の表現を籤で決め、即興で発表するのは、授業担当者としても、フィードバックの時間が十分とれず、研修生にとっても自分の発表の準備で頭が一杯で他の研修生の発表会話を聞いていないこともある。2007 年度に、このように準備の授業と発表の授業の日を別々に設けたのは研修生にとっても授業担当者にとっても有効であったと考える。

	2006 年度	2007 年度
8 回目の授業	スピーチの準備と発表	スピーチ及び対話形式の会話準備
9 回目の授業	対話形式の会話準備と発表	スピーチ及び対話形式の会話発表

図２　スピーチと対話形式の会話発表とその準備

5.3　スピーチ形式の設定

スピーチ内容に関しては、教科書で取り上げた1）映画（小説、ドラマ、芝居など）の紹介　2）理想の教師像　3）意見を述べる　と変更はなかったが、2006年度に発表が冗長になる傾向が見られたことを踏まえ、以下のような要点をまとめて述べる形式を紹介した。

今日は、私は○○という映画を紹介させていただきます。

映画の概要

この映画の素晴らしい理由は3つあります。
まず、～
そして、～
最後に、～

という訳で、まだご覧になっていない方は、
是非この映画をご覧になっていただきたいと思います。

図３　紹介スピーチの形式

「理想の教師像」、「意見を述べる」という課題についても同様に要点を3つに絞って話す練習をした。冗長なスピーチを回避するという目的もあったが、他の研修生に比べやや未熟な話者にとっては、スピーチの方向付けが明確になり、原稿作成の負担が軽減されたと考える。力のある研修生は、3つの点を提示し、その項目に従って内容を膨らませることができた。2006年度、筆者は「要点のみを取り出して効果的にスピーチにまとめる表現力の養成が必要である」と報告したが、2007年度において多少の進展があったと考える。

教科書では、スピーチにおいて、「これは一体どういうことでしょうか」「皆さんはどうお考えでしょうか」などの聴衆に語りかける表現、テクニックを紹介したが、2006年度、2007年度とも研修生はこのテクニックを上手に用い、聴衆とのコミュニケーションをとってスピーチを行っていた。

5.4　フィードバック

2006年度は、各研修生に紙面によりフィードバックを行った。発音、アクセント、イントネーションなど音声に関する個別の問題に関しては、やはり口頭でのフィードバックが欠かせないが、研修生の時間割りもぎっしり詰まっており、個別に面談指導する時間が

とれなかった。2007 年度は、研修生に共通に見られる問題点、間違いをできるだけ授業で取り上げ、注意を促すようにした。そして、研修生の間でいくつか見られた韓国人学習者に特徴的な問題をまとめたものを最後の授業で示した。以下のような問題点があった。

1）　使役形の機能が正しく使えていない。
　～させていただく⇒～ていただく／～てください
　○○の意味と使い方がよくわかりません。先生、教えさせていだたきたい。
　⇒教えていただきたい／教えてください。

2）　意向形の機能を正しく使えていない。
　～しようとする　⇒しようと思う
　これからはいつも日本語で話そうとします。　⇒話そうと思います。

3）　疑問詞が正しく使えていない。
　何⇒どんな
　何スポーツが好きですか。　⇒どんなスポーツ

4）　表現の選択を誤る。
　先生に似ていきたい　⇒真似をしたい

5）　変化を表す表現が正しく使えていない。
　だんだん面白くなります　⇒だんだん面白くなってきました。

6）　アクセントが正しくない。
　おもしろ「かった　⇒おもしろか｜った

7）　語彙の誤り
　・　教師の熱性が伝わる　　⇒熱意
　・　計算、お願いします　　⇒会計、お勘定
　・　自信感を持つ／無くす　⇒自信
　・　映画、本、歌 … の題目　⇒題名
　・　感想する　　⇒鑑賞する

8）「言う」「話す」の使い分けを誤る。

9）　似て非なる漢字の使用

「鑑賞」「感想」はそれぞれ「映画や芝居を鑑賞して、その感想を言う／書く」と使われるはずである。しかし、「私は映画をカンソウ（鑑賞）しました」という様な発言と「映画／音楽を感想しました」という文章も現れた。何故このような間違いが出てくるのか問うてみると、韓国語で「鑑賞」「感想」の発音が全く同じで混乱を起こすとのことであった。漢字語彙として明確に理解されていないとも考えられる。

さらに、漢字の間違いが目についた。確かに似てはいるが扁が違っていたり、冠があるべきところになかったり、ないところにあったりと正しくない漢字表記が目立った。また、基本的漢字語彙をひらがなで書くなど、漢字力の弱さが見られた。漢字表記は、会話力とは直接の関連はないが、上記のような「感想・鑑賞」の取り違えを始め、語彙不足の原因として漢字力の弱さがあげられる。

5.5 「コメント及び質問カード」の交換

毎授業後、A4サイズの4分の1の大きさのカードにその日の授業についてのコメントや、授業中タイミングを逸して質問できなかったことや、自分の理解が正しいかどうか確認する質問、授業とは直接関係ないが聞きたいことなど、気がついたことを研修生に自由に書いてもらった。授業担当者はそのカードに目を通し、余白または裏面に返信を書き、次の授業で返却をする。研修生とのコミュニケーションカードとも言うべきものである。左隅に穴を開け、毎回綴じていった。そうすることで各研修生がどのような質問をしていたのか、どのようなコメントを寄せていたのかを継続して知ることができる。さらに書いたものから、文法的間違いが繰り返され習慣化していること、上述の「一生懸命勉強しようとします」「～について教えさせていただきたいんです」「今までいろいろ勉強して、だんだん面白くなります」などの共通する間違いにも気づくことができた。

カードに書かれたことで特徴的だったのは、日本語力の弱い研修生は、質問はあまり書かず、毎回自分の授業への熱意を伝えようとするコメントが多かったことである。研修生の1人から「理想の教師の条件に順位をつけて、同僚教師と韓国語で話しても難しいことをどうして日本語で話すことができますか。心配です。」というコメントが寄せられた。この文章からすると課題が難しすぎるのかと思い、本人に尋ねてみたところ不満というわけではなく、難しいテーマだということを伝えたかったとのことであった。また、ある時、授業担当者が授業で時代劇を説明した際、「チャンバラ」という言葉を使用したのだが、授業でその言葉の意味を聞き逃してしまい、そのままになっていた研修生からこのカードであらためて質問があり、答えることができた。授業担当者の話す日本語が速すぎるのでもう少しゆっくり話して欲しいという要望も寄せられ、研修生の声を汲み取ることができ、授業を進める上で大

変役に立った。

その他のコメント及び質問としては以下のようなものがあった。

「話し言葉の音の変化を学びたいです」

「韓国人の間違いやすい表現は何ですか」

「終助詞の使い方がよくわからないのですが、教えてください」

「くだけた会話の練習がしたいです」

これらのコメント及び質問は、その後の授業で取り上げていく予定の項目であった。研修生の興味の在り処を前もって知ることができ、授業内容が研修生のニーズに応えられることがわかり、これから授業で扱っていく項目であることを伝えることができた。

ちなみに授業内容には直接関連のない質問として、次のようなものが寄せられた。

「日本では、今は旧暦は全然使われていないのですか」「韓国では、いつも食事の時に何か一言声をかけるのですが、日本語では何と言うのか教えてください」「畳の縁や敷居を踏んではいけないと聞いたことがありますが、その他のタブーを教えて下さい」これらの質問に関しては､次回の授業でクラス全体に紹介し､質問を共有し､授業担当者が説明をした。

研修生の１人から､「毎回コメントを書くのは大変だった。特に何も書くことがない時もある」というコメントを貰った。何も書くことがなければ書かなくてもいいです、と授業開始時には伝えていたのが、授業が進むに連れて、授業担当者が知らないうちに、コメントを要求する態度が前面に出ていたのであろうと考える。毎回、何か書かなければならないのが負担になった研修生もいたであろう。反省点である。

6. 今後の課題とその改善案

2006、2007 年度と会話（中）の授業に携わり、以下の点にさらに指導の強化の必要を感じた。

1） 要点を絞って発表をするためのスピーチの枠組みの提示

ある人物、映画の紹介などスピーチ形式の発話が冗長気味である。これに関しては 2007 年度に要点を絞って発表するという形式を示し、練習を試みた。日本語の口頭表現力が高くない研修生にとっては、１つの枠組みを与えることでスピーチの形式が整い、明瞭なスピーチになった。口頭表現力の高めの研修生に関しては、冗長さを押さえ、めりはりのあるスピーチになった。また各研修生への時間配分をコントロールするのにも役立った。

2） 様々な場面会話の練習

全般に対話形式の発話が苦手で、くだけた場面での会話では自然さに欠けるようである。研修生たちは、教師という職業柄、くだけた会話表現など実際に運用する機会は多くはないと思われるが、それでも終助詞の使い方を始め、会話に不可欠のイントネーションなど

を学び、練習を重ね、日常会話での流暢さを目指したい様子であった。また、くだけた会話だけでなく、敬語表現もあまり使い慣れていない様子であった。研修生活中での多少あらたまった場面の会話においても、「～させていただきたいのですが」と言うべきところを正しく言えていない場面に遭遇したこともある。様々な場面会話の練習が必要だと考える。

3）　テレビドラマや映画など視聴覚教材の併用

ハラハラ、ドキドキ、ワクワクなどのオノマトペを使った感情表現やその他の心情表現を教科書で紹介した。「切ない」の心情を理解してもらうために韓国ドラマ「冬のソナタ」のパク・ヨンハ演じるサンヒョクの心情を例としてあげた。どんなに思っていてもチェ・ジウ演じるユジンの心は、ペ・ヨンジュン演じるミニョンに向けられている。サンヒョクの心情こそが「切ない」と説明すると、すっきりと把握できたようだ。紙面のみでの感情表現の提示には限界がある。人間関係やそのおかれた状況など共有できるドラマや映画などの視聴覚教材の併用が望ましい。研修生の日本のドラマや映画の視聴率はかなり高いようだが、筋を追うのが主で会話の細部まで観察しているわけではないであろう。このような視聴覚教材を用い、話し言葉特有の音の変化、アクセント、イントネーション、間合いの取り方、終助詞の使われ方、どのような年代のどのような社会的地位の人物がどのような表現を用い、どのような話し方をしているのか、など授業で詳細に観察できると効果的であると考える。さらに、ドラマ、映画などの視聴覚教材を使用し、登場人物の心情描写、状況や場面の説明、因果関係の説明などの口頭練習、作文練習も可能であろう。

4）　漢語系の語彙の強化

会話（中）の教科書2−1課では、映画・芝居関連語彙及び表現をまとめて提示した。それらを参照しつつ、研修生は自分の話したい内容を組み立てていったが、それとは逆に、一連の語彙に触発されて話す事柄が湧いてくるという場面もあった。日本語と共通する漢語系の語彙を多く用いる韓国語話者にとって、漢字熟語の正確な読み方、発音を身につけていくことが効果的かつ確実な上達への道と考える。前述の「鑑賞」「感想」の混同による間違いの類いは回避したい。同時に漢字の正しい表記も身に付けることができよう。

参考文献

許明子（2007）「京畿道外国語研修院現職日本語教師研修の実施報告― 2006年度韓国国内研修の実施について―」『筑波大学留学生センター日本語教育論集』第22号：47-70

斉藤孝（2007）『話し上手聞き上手』ちくまプリマー新書

高橋純子・小池康（2007）「京畿道外国語研修院現職日本語教師研修のための教材開発―中級会話教材制作―」『筑波大学留学生センター日本語教育論集』第22号：57-70